

悪魔に対する勝利

2008. 1. 8 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

マタイの福音書 3章16節から4章11節

こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野の上って行かれた。そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」イエスは言われた。「引き下がり、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。

今朝或る姉妹が、「最近のみことばの素晴らしさを以前よりもずっと深く知るようになった」と話していました。みことばを読むこと、暗記することと、みことばを体験的に知ることとは全く違うということではないでしょうか。

先ほど司会の兄弟が言われましたが、今年は「希望の年」だそうです。同時に「戦いの年」にもなるのではないかと思います。もちろん私たちの敵は決して人間ではありません。「私たちの戦いは、悪霊や悪魔に対する戦いである」と聖書ははっきり語っているのです。この私たちの敵である「悪魔」は、いろいろな名前を持っています。悪魔は「試みる者」です。或いは、「悪い者」で「悪しき者」と呼ばれています。「陥れる者」という全世界を惑わす「歳を経た蛇」「訴える者」「嘘つき」「偽りの父」「人殺し」「ベルゼブル」即ち「悪霊のかしら」「この世の神」「空中の権威を持つ君」「泥棒」「狼」「ほえたける獅子」等々と

呼ばれています。悪魔についての聖書の記述は27箇所あります。しかし、なぜ「希望

の年」であるのでしょうか。それは、ヘブル書10章37節に次のように書いてあります。

ヘブル人への手紙 10章37節

「もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。」

ですから、どのような悩み、苦しみがあるとしても、もうしばらくと考えれば、全く違うのではないのでしょうか。「もうちょっと…」と。悪魔ももちろんそれを知っているのですから。

ヨハネの黙示録 12章12節

「それゆえ、天とその中に住む者たち。喜びなさい。しかし、地と海には、わざわいが来る。悪魔が自分の時の短いことを知り、激しく怒って、そこに下ったからである。」

と聖書は記しています。そして次のみことば、

22章12節

「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」

即ち「救うため」ではなく、また未信者を裁くためでもありません。「救われた人々に報いるため」に来られるのです。つまり、花嫁と呼ばれている「イエス様のからだなる教会」を迎えるために来られます。それを考えながらペテロは、当時いろいろなことで悩んでいた兄弟姉妹を励ますために書きました。

ペテロの手紙・第一 5章8節、9節前半

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのよう、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。

と。「堅く信仰に立って」とは、イエス様と結びついていれば大丈夫という意味です。

今日のテーマは『負けてしまった最初のアダム。そして勝利を得た最後のアダムであるイエス様』です。

読んでいただきました聖書の中で、イエス様は悪魔に何と言われたかと言いますと、「主を拝め。主に仕えよ」と。

最初のアダムである者の敗北。負けてしまったことについて、創世記を読むと次のように書かれています。もう一度お読みします。

創世記 3章1節から3節

さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇

は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と仰せになりました。」

「それに触れてもいけない」と、神はそのようにおっしゃらなかったのです。(エバが自分勝手に思ったのです。)

4節

そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。」

つまり、神は嘘つきだということになります。

5節から8節

「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。

最初の間人は悪魔の誘惑に負けてしまったのです。どういう態度をとるべきだったかと言いますと、この悪魔である蛇を通しての声を聞いたとき、すぐ主のところに行き、「主よ。主よ。どうしたらいいのですか？ 分かりません」と言ったなら、問題は起こらなかったのです。しかし祈らずに、自分勝手に行動したことによって、悪魔の勝利になってしまったのです。

イエス様に出会った兄弟姉妹は、イエス様に従って行こうと心に堅く決心すべきです。即ち、イエス様が自分の人生の土台であり、イエス様が自分の人生のすべてであり、そしてイエス様こそ自分の人生の目的であるべきです。イエス様の場合はそうだったのです。

もう一度マタイ伝に戻りまして、
マタイの福音書 4章10節

『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』

この箇所は、イエス様が荒野で試みられたときに語られたものです。この4章の箇所に

題名をつけるなら、『イエス様の悪魔に対する勝利』とつけることができるのではないかと思います。ただ逆境においてのみ、または困難の中においてのみ、人は初めて自分の内にいったいどんなものが潜んでいるかを知るようになります。

イエス様は、人間が言い表わすことができないほど深い、非常な苦しみの中に置かれていらっしやいました。イエス様はこの悪魔の誘惑の中で試みられたのです。この試みの中にあつてなお、私たちはイエス様の素晴らしさ、イエス様の偉大さを見ることが出来ます。

4章1節後半

御霊に導かれて荒野に上って行かれた。

とあります。自分勝手に、「行こう」ということではなかったのです。悪魔に導かれたのではありません。聖霊に、御霊に導かれました。即ちそれは、イエス様が100パーセント御霊によってのみ導かれたのであって、ご自分からはことを行なおうとなさることなどあり得なかったのです。一瞬たりともイエス様は、ご自分の思うところに従われなかったのです。イエス様は一度もご自分の考え、ご自分の感情、ご自分の意志によって行動なさったことはありませんでした。ですから私たちは、イエス様のことが理解できないのです。イエス様は、あらゆる人間と全く違っておられたからです。

ヨハネ伝の中で、イエス様は次のように証しなさいました。

ヨハネの福音書 14章30節

「わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることはできません。」

「この世を支配する者」とは、言うまでもなく悪魔です。「支配権」は、父なる神から既にイエス様に与えられていたからです。「彼（この世を支配する者）は、わたしに対して何もすることはできません」とみことばにあります。悪魔は「この世の支配者」でありながら、イエス様に対しては何もすることができませんでした。

イエス様は天の父なる神に対しては、如何なるときにも全く「服従」なされたのです。その「従順」なイエス様に対しては、悪魔が何一つできなかったのです。ここで、二つの世界がぶつかり合うのを私たちは見ます。一つは「主なる神の世界」。一つは「悪魔の支配するこの世」。それは光と闇、真実と偽りの対立です。

もう一度マタイ伝3章を読みましょう。

マタイの福音書 3章16節、17節

こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」

父なる神と御子なるイエス様、また御霊なる神は、「世の救い主」をお示しになったので

す。イエス様が洗礼を受けられ、その洗礼を受けられることによって、ご自分のいのちを世の救いのために捧げることを明らかになさいました。これこそ、イエス様がこの世に來られたご目的でした。

マルコ伝 10章45節。マルコ伝の中の一番大切な箇所ではないかと思ひます。

マルコの福音書 10章45節

「人の子が來たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、**多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。**」

イエス様は、一つの宗教を創る気持などありませんでしたし、新しいことを教えるためにおいでになられたのでもありません。ご自分のいのちを贖いの代価としてお与えになるためです。イエス様が洗礼を受けられたとき、天が開けて御霊がくだり、次のような声が聞こえました。

マタイの福音書 3章17節

また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」

これこそ三位一体の啓示そのものです。私たちはこの箇所を読むとき、イエス様のみが父のみこころにかなった者であられることに気がつきます。イエス様のみが父なる神の喜びです。誰でもイエス様を自分の救い主として受け入れた者は、父なる神の愛を体験することができます。このことを説明するためにふさわしいかどうか分かりませんが、一つの物語を読んだことがあります。

戦争中のことです。ある裁判官が自分の部屋で仕事をしていました。突然ノックをする音に気がついてドアを開くと、そこに一人の青年が立っているのを見ました。その青年は、たった今戦場から帰ってきたばかりで、全身は泥にまみれて、ひどくみすぼらしい惨めなかっこうをしていました。裁判官のほうは非常に忙しくしていたので、彼のことにかまわず仕事を続けようと思ひましたが、そのとき青年が差し出した手紙を見たとき、思わず持っていたペンを落としてしまいました。見覚えのある字が手紙の表に書かれていたからです。何とそれは戦場にいるはずの息子の手によるものでした。急いで手紙を開けて読みました。それは次のように書かれていました。

「愛するお父さん。この人は僕が戦場で知りあつた友だちです。彼はもう治らない病気のために野戦病院を出て国に歸されました。どうかお父さん、友だちを僕のように息子だと思ひて、大切にあなたの家においでください。僕の心からのお願いです。どうぞ聞いてください」。

そのとき父親である裁判官は飛び上がって喜んで、息子の言つた通りにこの青年を息子と同じように愛し、いつくしんだのでした。

これと全く同じように、主なる神の愛は、その御子であられるイエス様を受け入れて悔

い改めた者の上に注がれるのです。エペソ書の中に素晴らしいことが書かれています。

エペソ人への手紙 1章6節

それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめ
たたえられるためです。

「神がその愛する方によって、私たちに与えてくださった恵みの栄光」。誰でもイエス様を
受け入れる者は、永遠のいのちを持ち、主なる神に喜ばれる者となるのです。けれども、
イエス様を拒む者は主なる神の怒りがその上にとどまる、と聖書は記しています。

ヨハネの福音書 3章36節

御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見る
ことができなく、神の怒りがその上にとどまる。

マタイ伝に戻りまして、40日の間イエス様は荒野で断食をして祈られました。それは、
主のこの世における公の奉仕の準備のときでした。祭司も預言者も王も、油を注がれるこ
となしに、その務めに入ることは許されませんでした。油注ぎは聖霊に満たされることを
象徴します。荒野での体験は、イエス様がこの世のために全くご自分を捧げる準備が出来
ておいでになることを明らかにされました。そしてその生涯の終わりに、イエス様は次
ようにおっしゃられたのです。祈りの中のみことばです。

ヨハネの福音書 17章4節

「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、
地上であなたの栄光を現わしました。」

とイエス様は正直におっしゃられたのです。

地上において主なる神の栄光を現わすことは、最初のアダムの務めでした。すべてのも
のが、このアダムにゆだねられていました。彼は地上の王だったと言ってもよいでしょう。
そのとき、ただ一つの条件が与えられておりました。それは全き主なる神のご支配のもと
に、生活をするということだったのです。すべての被造物の支配者であるアダムは樂園に
住んでおりましたが、悪魔に誘惑され耳を貸し、悪魔のことばを信じてしまったのです。
彼は自分の考えと、思いによって、主なる神に逆らう道を選んだのです。主なる神から離
れることによって、アダムはすべてのものを失ってしまいました。

聖書の中で、最初の人アダム、最後のアダム、或いは第一の人、第二の人と、区別して
語られているのです。一箇所読んでみましょう。

コリント人への手紙・第一 15章45節から47節

聖書に「最初の人アダムは生きた者となった。」と書いてありますが、最後のアダム
は、生かす御霊となりました。最初にあったのは血肉のものであり、御霊のものでは

ありません。御霊のものはあとに来るのです。第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。

と記されています。

聖書はイエス様のことを、最後のアダムと呼んでいます。この最後のアダムも悪魔の試みに会いました。けれどこの最後のアダムであるイエス様は、第一のアダムのように樂園におかれたのではなく、荒野において悪魔の誘惑を受けられたのです。またイエス様は、第一のアダムのように決して支配者の立場をおとりにならず、身を低くして貧しい者の姿をとられました。礼拝のときによく読む箇所、ピリピ人への手紙 2章6節から読みます。

ピリピ人への手紙 2章6節から8節

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

イエス様は全く従順であられましたので、この世の滅びゆく全人類のための救い主とされたのです。父なる神に対する「全き服従」を通して、イエス様は第一のアダムが失ったすべてのものを再び得られました。第一のアダムはその不従順によって神の栄光を失いました。結果として、ローマ書3章23節に書いてありますが、すべての人は罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、人間は神の怒りを受ける者となってしまいました。

エペソ書2章3節によると、

エペソ人への手紙 2章3節

私たちもみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

人間は神の怒りを受ける者となってしまった、とはっきり書かれています。そして悪魔がこの世の支配者となってしまいました。司会の兄弟が言われましたように、今の世界はもう混乱そのものです。これは悪魔の支配の結果です。けれど主はそれを許しておられるのです。しかしこのことは、私たちにとって「希望の泉」ということができます。イエス様がお出でになりつつあるからです。「もうちょっと」ですね。

コリント第二の手紙4章4節を読むと、確かに悪魔はこの世の神と呼ばれています。

コリント人への手紙・第二 4章4節

…この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にか

かわる福音の光を輝かせないようにしているのです。

「この世の神」とは、即ち悪魔です。

イエス様は試みられたのです。このマタイ伝4章を読むと、イエス様の受けられた3種類の誘惑について書かれています。

旧約聖書の中で、来るべき救い主は「まことの祭司」として、「まことの預言者」として、「まことの王」として書かれています。そしてこのマタイ伝の記事の中でも、イエス様がまことの祭司、まことの預言者、まことの王として書かれているのを、私たちは知ることができます。

・最初の誘惑を通して、イエス様おひとりだけが、この世において全く罪のないお方であることを知ります。全く罪のない主イエス様は、同時にまことの祭司であられ、仲介者であられます。この試みを通して、イエス様はご自分が、この人類を完全に救う能力をもっておられることをお示しになりました。

・第二の誘惑を通して、イエス様おひとりだけが、決して「偽ることのないお方」であることを証明なさいました。まことの預言者として、イエス様は悪魔の偽りをはっきりと拒否なさいました。

・そして第三の試みを通して、イエス様はご自分が「悪魔に対する完全な勝利者」であられることを示されました。まことの王として、イエス様はすべての誤った礼拝を拒否されたのです。

最初の試みは、「あなたが神の子なら、この石がパンになるように命じなさい」とあります。「もし神の子なら」。神の子とは、言うまでもなく神です。肉体をとられた永遠なる神です。「悪魔」といわれることばは、単なる影響力とか、単なる力ではなく、一つの人格者そのものを指しており、(今話しましたように) この世の支配者と呼ばれています。悪魔の目的とするところは、人を滅びの穴へと導くことです。永遠の破滅に陥れることです。聖書は、悪魔のことを、まず「訴える者」「偽る者」「人殺し」と呼んでいます。

イエス様は、もちろん簡単に石をパンにすることがおできになるのです。イエス様は、マタイの福音書 3章9節後半

神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです。

と言われたのです。その事実として、イエス様はただ五つのパンで5千人もの男子の空腹を満たした、と聖書は記しています。そしてまた12かごのあまりさえ出たほどでした。マタイの福音書 14章19節、20節

そしてイエスは、群衆に命じて草の上にすわらせ、五つのパンと二匹の魚を取り、

天を見上げて、それらを祝福し、パンを裂いてそれを弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れの余りを取り集めると、十二のかごにいっぱいあった。

イエス様は、悪魔の攻撃に対して、次のみことばをもって応じられたのです。

申命記 8章3節

それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということ、あなたにわからせるためであった。

と記されています。

イエス様の武器とは、ご自分の思いや考えではなく、「みことば」だけでした。

イエス様は人として天の父なる神に、全く服従の立場をおとりになられました。イエス様は、この地上においてただ父なる神の栄光を現わすことのみを願われ、ただの一度もご自分のために生きようとはなさいませんでした。父なる神のみこころを行なうことのみが、イエス様の唯一の喜びでした。

ダビデの書いた詩篇40篇は、おもにイエス様に対する預言のことばではないかと思えます。

詩篇 40篇8節と9節前半

「わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。」私は大きな会衆の中で、義の良い知らせを告げました。

そしてイエス様ご自身の証しですが、次のようなものでした。

ヨハネの福音書 4章34節

イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」

石ころからパンを作ることは、決して罪ではなかったでしょう。けれど、イエス様はただ一度さえも、ご自分の思うままに行動なさらなかったのです。行動なさる前にいつも祈られたのです。「お父様、行なってもいいのでしょうか?」「だめですか?教えてください」。

ヨハネ伝5章19節に、再びイエス様の証しになりますが、次のように書かれています。

ヨハネの福音書 5章19節

そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。…」

30節

「わたしは、自分からは何事も行なうことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。」

人間には決して言えないことです。

8章28節後半

「また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。」

と書かれています。

イエス様は、ご自身の自由な意志によって、喜んで、心からご自分の生涯を父なる神のみこころと導きの中に投じられました。そしてイエス様は、ご自分が天の父に服従するのを妨げるすべてのものを退けられました。

私たちは次のことに注意しなければなりません。即ち、勝利の秘訣は常に神のみことばへの全き服従にかかっているのです。何年か前に統一教会からある一人の女子学生が集会を訪れました。そして彼女は次のように言ったのです。「私はこの集会のあり方が大嫌いです。なぜならこの集会の人たちはただ聖書に忠実だからです」。(笑) もし、私たちがただ聖書のみに従うなら、統一教会の人々だけではなく、悪魔さえも手出しをすることができません。イエス様の武器はただみことばだけでした。

なぜ、みことばはそんなに大切なのでしょうか。

・それはみことばを通して光が与えられるからです。詩篇の作者であるダビデは証したのです。

詩篇 119篇105節。

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

みことばがなければ人間は、知らないうちに盲目にされてしまいます。また神のみことばは、まことのよろこびを与えるものです。同じく119篇162節で、ダビデは言ったのです。

162節

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。

喜びたいと思うなら、みことばを食べて、みことばを自分のものにしてください。これを体験的に知るようになったのは、エレミヤという預言者でした。本当にこのエレミヤ書を読むとびっくりするのです。彼は主によって召し出されました。けれど、主は初めから彼に

言われたのです。あなたは何をしても実にならない。全部無駄です。けれどしなさい、と。そして彼は従順に従ったのです。彼は妬まれるようになり、憎まれるようになり、刑務所に入れられるようになりました。けれど彼は悩みながら喜ぶことができました。どうしてでしょうか。

エレミヤ書 15章16節前半

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。

「食べました」。研究して分かった、のではないのです。「みことばですから信じます」と。断固たる態度をとったからです。

・また、みことばは真理そのものです。

詩篇 119篇160節

みことばのすべてはまことです。

とダビデは言いました。

イエス様はご自分の祈りの中で、ヨハネ伝17章17節でおっしゃいました。

ヨハネの福音書 17章17節後半

あなたのみことばは真理です。

感じて感じなくても、理解しても理解できなくても、そのことは関係ありません。聖書のみことばは、真理そのものです。イエス様は決してパンをもって人を従わせようとなさいませんでした。人は物質的に多く恵まれていても、心の奥には常に大きな餓え渴きをもっているものです。こんにち私たちの背負っている最も大きな問題の一つは、私たちが物質的に豊かになったにも関わらず、心のうちは貧しく餓え渴いているということです。

イエス様は旧約聖書のみことばを引用して言われました。マタイ伝4章4節、もう一度読みます。

マタイの福音書 4章4節

イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」

「神の口から出ることば」とは何を意味しているのでしょうか。それはまさに聖書に書かれている「神のみことば」であり、同時にそれはイエス様ご自身を現わしています。

ヨハネ伝から2、3箇所読みましょう。

ヨハネの福音書 6章33節

「というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」

35節

イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」

37節

「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」

「わたしは天から下って来たパン」、自分のところを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみところを行なうためです、と。

40節前半

「事実、わたしの父のみところは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。」

47節、48節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。わたしはいのちのパンです。」

51節前半

「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。」

・主なる神のみことばはまた、主のご意志でもあります。

主なる神は、「人間を救いたい」と心から思っておられます。

マタイの福音書 1章21節後半

「この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」

罪の赦しこそ、人間に与えられている最高の宝物です。素晴らしいプレゼントです。主は心から赦そうと思っておられます。赦される条件とは何でしょうか。

ヨハネの手紙・第一 1章9節

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

「私たち」とは、信じる者のことなのです。すでに救われている者のことなのです。そのようなことは考えられないし、想像もできません。しかし本当なのです。

最初の誘惑を通して、私たちはイエス様だけが罪のないお方であり、父なる神のみところを行なうことのみを願っておられたことを知ります。イエス様は父のみところ、即ち、

この人類をその罪の中から救うことを願われ、何一つご自分のためにしようとはなさいませんでした。それゆえイエス様は真（まこと）の祭司であられ、聖なる神と私たちの唯一の仲介者であられます。イエス様だけが私たちの罪の問題を解決してくださいます。

罪は、私たちを主なる神から遠く引き離してしまいます。その隔たりとなった「罪の壁」を、イエス様はご自分の十字架の死をもって取り除かれました。イエス様は、私たちの当然受けるべきはずの罪に対する刑罰をご自分で負われました。

最後に二箇所読んで終わります。

コリント人への手紙・第二 5章21節

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

罪を知らない方が、罪のかたまりとされたというこの事実こそ、永遠にわたって私たちの礼拝のもとになるに違いありません。

もう一箇所、

テモテへの手紙・第一 2章5節

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。

また来週続けましょう。

了